

### 資料室だより 113

資料室だよりで初めてCDをご紹介します。録音資料は例外的に《キリスト教音楽の歴史》を過去に購入しておりますが、普段資料費で購入するのは基本的に楽譜と書籍のみです。

それで今回ご紹介することにしたのは、本科の第三期卒業生で、卒業後レーゲンスブルクに留学し、当地で教会音楽のディプロマを取得された山田早苗さん（北浦和教会オルガニスト）が出されたCDの寄贈を受けたからです。

内容はエベン Eben, Petr (1929-2007) 作曲の「ヨブ」という1987年のオルガン独奏曲です。

エベンはチェコを代表する現代作曲家。カトリックの家庭で育ちますが父親がユダヤ人であったため、ナチによって強制収容所に抑留された経験もあります。ドイツ占領下で苦難の少年期を送ったことは想像に難くありません。ここに紹介する「ヨブ」に作曲をしようと思いつくこと自体、苦しみの意味をキリスト教的に考え、それを音楽によって昇華しようとしたことにほかならないと思います。大戦中、ヘブライの民はヨブ記を通して民族の苦難について思いめぐらせていたといわれます。彼もまた自分の表現手段によってそれを成し遂げたわけですが、言葉に作曲する声楽ではなくオルガンという瞑想的な媒体を使います。

実際にエベンと交流があった山田さんが教会音楽家として現代世界へのひとつの問いかけとして「ヨブ」というCDを作製されたと私は理解しています。そして卒業生の業績ということで、そしてまたグレゴリオの家につながる方々の活躍をご紹介する意味でCDのことをお伝えしました。事務局で購入することもできます。

エベンには、「ヨブ」のほか、オルガン曲としては“*Mutatione*”、“*Biblical Dances*”、“*Hommage a Dietrich Buxtehude*”、“*Hommage a Henry Purcell*”が、ミサ曲を含む宗教声楽曲には“*Ordinarium Missae*”、“*Missa cum populo*”、“*Prague Te Deum*”、“*Proprium festivum monasteriense*”などがあります。チェコ人としてのアイデンティティの表現としてボヘミア兄弟団の聖歌を用いている作品も見受けられます。「ヨブ」のなかにも最後にボヘミア兄弟団の讃美歌が挿入されています。

資料室には彼の作品がいまのところひとつもありません。今後収集の視野に入れていこうと思います。このようにして蔵書構成の幅が広がっていきます。